

ここはフッズスノーエリア（札幌市藤野野外交流施設）にあるリユージュ競技場。毎年、十二月中旬からコース作りが始まります。現場には至る所に四角い氷の山。木材やスコップ、バケツなどもあちこちに置いてあります。

競技場は、長さ約六百メートルのコンクリート壁に水を張り付けて作られます。氷は、重さが一個約八キロ、その数は約一万六千個にもなります。

氷と壁面との接着剤の役目を果たするのが「雪しぶ」。雪に水を混ぜ、シャベツト状にしたものです。木の葉や枝が混じると、植物が太陽の熱を吸収して氷が溶けやすくなるため、きれいな雪を注意して選びます。

壁面に直接水をまき凍らせて作る「パイピングコース」と違い、藤野のコースは一つひとつ手で水を積み上げて作る「天然コース」。日本では唯一、世界でもここ藤野と、リユージュ競技場が盛んなドイツの二カ所しかありません。

このように手間暇かけて出来るコース。実は地元石工や大工、造園業の

私たちが作った 日本一の 天然コース

方々が作っています。ゴムのハンマーを使って丁寧に氷を張っていく仕事はまさに本職の技。木材で足場を素早く組んだりばらばらに解体したりして、長い壁面を少しずつ移動し、約二週間かけて作ります。

この競技場は一九七二年（昭和四十七）年の札幌オリンピック開催に向けて建設されました。当時からコースを作っている大工の林雄次さんは、石工の仲間に誘われて始めました。

「コースの底をきっちり組むのが肝心。そこから上の氷が滑らかにつながっていないからね。氷の裏と表面を間違えて張るのも格好が



▲作業中のみなさん

悪いんだよ」。ベテランの林さんは細かい所にもこだわっています。



▲林さんが丹念に水まきをする、氷はピカピカに

札幌リユージュ連盟理事の竹田雄基さんは、普段は造園の仕事をしています。「雪しぶを張る角度を一定にしないと接着する氷の角度も変わるため、滑走スピードやコーナリングの方向

がずれてしまうので、気を使っています」。この重要な角度を測る分度器となるのは職人の皆さんの「目」なのです。

皆さんはコースの手入れも怠りません。特殊なカナを使って表面を削る、水をまいて滑らかにする、雪が積もれば竹ぼうきで払う、という作業を朝早くから夕方まで毎日繰り返します。

自らもリユージュ選手として活躍した竹田さんは「手作業ならではの癖がある分、滑る側にとってもコーナリングにテクニクが必要など、味のある滑りができるんですよ」と自慢のコースを見ながら話します。皆さんが丹精込めて作った日本一の美しいコース。今シーズンも、たくさんのリユージュが滑り抜けていくのを待っています。



▲足場はしっかり組んで



▲氷はひし形状に積む



▲製氷店から取り寄せた丈夫な氷を使います